

2009年6月15日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2006年度～2008年度
 課題番号：18720136
 研究課題名(和文) 作文教材開発のための「談話展開指標」の研究
 研究課題名(英文) A study of discourse markers for development of teaching materials for education of JSL composition
 研究代表者
 石黒圭
 一橋大学・留学生センター・准教授
 研究者番号：40313449

研究成果の概要：

本研究では、科研費を用いて、新聞、論文、エッセイ集、シナリオ集のコーパスの構築、および「談話展開指標」基礎資料の作成をおこない、それにもとづいて、接続表現の出現頻度順のリスト、および、個々の接続表現が持つ機能領域の広狭を示すリストを完成させた。その結果、接続表現の出現頻度と出現する接続表現の種類に、各ジャンルの特性を反映した特徴が見られること、および、接続表現の種類によって機能領域に大きな違いが見られることを明らかにした。さらに、先行文脈にどのような表現があるとき、特定の接続表現が出現するかという相関関係も、部分的ではあるが、明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	200,000	0	200,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	210,000	2,310,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：文章、談話、接続詞、作文、教材開発

1. 研究開始当初の背景

日本語学習者の作文を見てみると、中級、上級、超級とレベルが上がるにつれて、助詞をはじめとする1文内の文法上の誤りは減少する傾向が見られるが、接続詞をはじめとする1文を越える談話構成上の誤りはレベルが上がってもなかなか修正されない。

その背景には、談話構成上の要素、およびその機能について基礎的研究が不足しているという現状があり、そのことが日本語教育や日本語教材における談話構成教育の回避を招いていると考えられる。

そこで、本研究では、接続詞を中心とする「接続表現」に焦点を当て、そのジャンル別の頻度や機能を記述することにした。

2. 研究の目的

本研究は、日本語学習者の談話構成教育に役立つ基礎的資料を作成するために、以下の二つのことを目的としている。

(1) 接続表現のジャンル別出現頻度調査

日本語の母語話者によって書かれた文章における「談話展開指標」、すなわち接続詞を中心とする接続表現のジャンル別の出現頻度を、コーパスを用いて調査すること。

(2) 接続表現の機能領域・文脈環境調査

「接続表現」の機能領域や、その前後の文脈環境を記述し、文章理解のオンラインの過程のなかで、「接続表現」が文章理解のトップダウン処理にどのように役立っているのかを、コーパスを用いて解明すること。

3. 研究の方法

研究の方法は以下の(1)～(3)の通りである。

(1) ジャンル別コーパスの構築(2006年度)

新聞(社説・コラム)、論文、エッセイ集、シナリオ集を用いてジャンル別のコーパスを構築する(小説は既存のものを用いる)。具体的には以下の通りである。

新聞の社説

- 『毎日新聞』朝刊「社説」2001年1月1日～2005年12月31日(5年分)

新聞のコラム

- 『毎日新聞』朝刊「余録」2001年1月1日～2005年12月31日(5年分)

論文

- 『一橋論叢』日本評論社、2004年4月号～2005年3月号(131巻4号～6号、132巻1号～6号、133巻1号～3号：12ヶ月分)

エッセイ

- 日本エッセイスト・クラブ編(2001)『'01年版ベスト・エッセイ集 母のキャラメル』文藝春秋
- 同(2002)『'02年版ベスト・エッセイ集 象が歩いた』文藝春秋
- 同(2003)『'03年版ベスト・エッセイ集 うらやましい人』文藝春秋
- 同(2004)『'04年版ベスト・エッセイ集 人生の落第坊主』文藝春秋
- 同(2005)『'05年版ベスト・エッセイ集 片手の音』文藝春秋

小説

- 『新潮文庫の100冊』1995年、CD-ROM版
- 『新潮文庫の絶版100冊』2000年、

CD-ROM版

シナリオ

- シナリオ作家協会 年鑑代表シナリオ集編纂委員会編(2003)『'02年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会
- 同(2004)『'03年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会
- 同(2005)『'04年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会

(2) 接続表現の基礎資料作成(2007年度)

ジャンル別コーパスにもとづいて、接続詞を中心とする接続表現の出現頻度や機能領域の基礎資料を作成する。

(3) 出現頻度・機能領域一覧作成(2008年度)

接続表現の出現頻度や機能領域の基礎資料を用いて、接続表現の出現頻度順のリスト、および個々の接続表現が持つ機能領域の広狭を示すリストを完成する。また、それを用いて論文を執筆する。

4. 研究成果

明らかになった点は以下の(1)～(3)の3点にまとめられる。

(1) 接続表現のジャンル別出現頻度の傾向

接続表現の出現頻度と出現する接続表現の種類に、各ジャンルの特性を反映した特徴が見られることが明らかになった。具体的には、以下の通りである。

接続表現のジャンル別出現頻度は、高い順に、論文(25.5%)、エッセイ(13.2%)、社説(12.2%)、小説(10.4%)、コラム(7.9%)、シナリオ(3.0%)の順であった。なお、独話である講義は36.9%と高く、対話であるシナリオの3.0%と著しい対称をなしている。(表1参照)

【表1】総文数にたいする接続表現の出現頻度

ジャンル	総文数	接続表現数	割合(%)
社説	99,514	12,156	12.2%
コラム	36,527	2,895	7.9%
論文	19,705	5,020	25.5%
エッセイ	17,952	2,365	13.2%
小説	730,510	75,709	10.4%
シナリオ	38,984	1,186	3.0%
講義(参考)	6,717	2,481	36.9%

出現頻度の上位に来る接続表現の種類で見ると、どのジャンルも逆接基調であるといえるが、「論文」はさほどではなく、「講義」のような順接（正確には添加）基調に近い。（表2参照）

出現頻度の上位に来る接続表現の種類のパターンでジャンル毎の類似性を見ると、学術的な内容を備えた「論文」と「講義」、同じ新聞という媒体に属する「社説」と「コラム」、登場人物が存在し、目に浮かぶ描写を伴う「小説」と「エッセイ」が、それぞれ近い関係にあるジャンルであることがわかる。（表2参照）

【表2】接続表現の種類別出現頻度

	社説	頻度		コラム	頻度
1	しかし	2942	1	だが	667
2	だが	1752	2	しかし	259
3	また	821	3	ただ	171
4	さらに	582	4	だから	96
5	一方	494	5	もっとも	91
6	ところが	471	6	でも	82
7	ただ	420	7	さて	76
8	しかも	378	8	ところが	73
9	まず	317	9	では	67
10	とくに	246	10	それなのに	66
11	にもかかわらず	234	11	つまり	62
12	そのために	227	11	一方	62
13	それでも	221	13	そして	61
14	そこで	212	13	それでも	59
15	そして	199	15	そこで	54
16	たとえば	193	16	とくに	54
17	その結果	172	17	ちなみに	50
18	それなのに	114	18	まず	49
19	むしろ	105	19	その後	47
20	とりわけ	103	19	また	43
21	だから	99	21	たとえば	43
22	では	94	22	さらに	41
23	第二に	82	23	それにしても	29
24	なかでも	81	24	しかも	28
25	その後	78	24	ただし	28

26	結局	77
27	第一に	73
28	だからといって	72
29	それが	64
30	つまり	63

26	こうして	25
26	とはいえ	25
26	ぎゃくに	25
29	すると	24
30	いわば	23

	エッセイ	頻度
1	しかし	346
2	そして	249
3	だが	140
4	ところが	108
5	だから	94
6	また	83
7	でも	67
8	つまり	55
9	たとえば	52
10	そこで	45
11	しかも	44
12	さて	42
13	すると	38
13	ところで	38
14	まず	36
16	けれども	35
16	それでも	35
18	では	31
19	ただ	30
20	結局	29
21	さらに	28
21	その後	28
23	したがって	27
24	もっとも	26
25	とくに	25
26	こうして	24
26	一方	24
28	それで	23
29	とにかく	21
30	それに	20

	論文	頻度
1	しかし	700
2	また	488
3	そして	305
4	さらに	233
5	たとえば	204
6	つまり	195
7	すなわち	194
8	したがって	189
9	まず	155
10	そこで	113
11	一方	112
12	だが	106
13	このように	96
14	ただし	94
15	なお	90
16	しかしながら	85
17	つぎに	81
17	他方	81
19	とくに	68
20	ここで	63
21	なぜなら	58
21	ゆえに	58
23	では	57
24	最後に	52
25	ところで	48
26	その結果	47
26	さて	47
28	こうして	46
29	そのため	43
29	それにたいして	43

	小説	頻度
1	しかし	15464
2	そして	10788
3	だが	3553
4	それから	3051
5	すると	2755
6	でも	2234
7	だから	2226
8	ただ	2086
9	また	2034
10	それで	1918
11	それに	1917
12	ところが	1642
13	そこで	1283
14	つまり	1147
15	そうして	1134
16	しかも	1096
17	とにかく	1073
18	けれども	1000
19	それでも	846
20	もっとも	812
21	で	614
22	それにしても	540
22	ところで	540
24	たとえば	517
25	ことに	509
26	したがって	487
27	そうしたら	479
28	あるいは	473
28	まず	473
30	さらに	448

	(参考)講義	出現数
1	で	1108
2	それから	251
3	そして	146

	シナリオ	頻度
1	でも	227
2	だから	145
3	じゃあ	84
4	それで	69
5	だって	62
6	しかし	37
6	で	37
8	けど	35
9	それから	31
10	それに	30
10	だけど	30
12	それでは	28
13	そうしたら	27
13	では	27
15	とにかく	25
16	そして	23
17	それが	15
18	って	14
19	それでも	13
19	それなら	13
19	ただ	13
19	ところが	13
23	つまり	11
24	ですから	9
25	まず	8
25	結局	8
25	とくに	8
28	それなのに	8
29	あと	7
29	さて	7
29	それにしても	7

17	あるいは	28
18	あと	24
19	それでは	22

4	つまり	99
5	だから	80
6	でも	51
7	ところが	49
8	ですから	48
9	んで	53
10	それで	43
11	たとえば	40
11	ただ	40
13	そうすると	38
14	では	37
15	しかし	34
16	じゃあ	31

20	まず	18
21	それにたいして	18
22	そこで	15
23	と	12
24	また	12
25	ということで	11
26	というか	10
27	とくに	9
28	それが	9
29	さらに	8
30	そんなふうに	8
31	けれども	8
32	ただし	8

(2) 接続表現の機能領域の傾向

機能領域については、接続表現のうち、「あるいは」「たとえば」「したがって」「一方」の四つを調査した。その結果、接続表現の種類によって機能領域に大きな違いが見られることも明らかになった。具体的には、以下の通りである。

「あるいは」は先行文脈、後続文脈ともに機能領域が狭い、「たとえば」は先行文脈の機能領域が狭く、後続文脈の機能領域が広い、「したがって」は先行文脈の機能領域が広く、後続文脈の機能領域が狭い、「一方」は先行文脈、後続文脈ともに機能領域が広い。

機能領域が広いものについては一律に広くなるわけではなく、広いものとそうでないものに二極分化する傾向にある。

文の長さが短いジャンルほど、接続表現別の機能領域に差がなくなり、全般的に狭くなる傾向がある。

(3) 接続表現の文脈環境の影響

接続表現はオンラインで認識されるため、接続表現までの文脈がどのような形態的指標によって導かれるかということを知ることが役に立つ。本研究では、確実な判断を表す副詞「たしかに」「もちろん」「ほんとうに」を例に、比較をおこなったところ、逆接の接続表現を導く強さに違いがあることがわかった。具体的には、以下の通りである。

「たしかに」には逆接の接続詞を導く力がかなり強い。「もちろん」は「たしかに」ほど強くないが、逆接の接続詞を導く力はある。「ほんとうに」は逆接の接続詞を導く力がまったくない。

「たしかに」「もちろん」「ほんとうに」の逆接の接続詞を導く力は、ジャンルによる違いがある。

最終的な目的であった教材化までは至らなかったが、(1)～(3)の研究成果をとおり、これまでほとんど知られていなかった接続表現の出現頻度や種類別の機能の分布や偏りを、ジャンル別のコーパスを用いて明らかにしたことで、接続表現の教材作成のための基礎的な資料は整えられたと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12号、pp.73-85、2009年、査読有

石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子「接続詞の機能領域について」『言語文化』46号、ページ未定、2009年、査読無

〔学会発表〕(計2件)

石黒圭「接続表現の機能領域について」名古屋外国語大学日本語学科講演会、2007年11月8日、名古屋外国語大学

石黒圭「文章理解における予測研究の方法と可能性」第10回日本語教育学会研究集会(中国地区)講演会、2007年12月1日、広島大学

〔図書〕(計1件)

石黒圭『文章は接続詞で決まる』光文社、2009年、256ページ

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

石黒圭

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者
なし